<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Title</td>
<td>「嵐の前」と「リシニウス」</td>
</tr>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>長繩 光男</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>一橋論叢, 61(2): 269-276</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>1969-02-01</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/2542">http://doi.org/10.15057/2542</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
「嵐の前」と「リシュイユ」

長 塗 光 男

一八四八年に西欧の思想界は新たな転換期を迎える。しかし、西欧を席捗した革命の大波にとって、ロシアの統一ロシアは強固な堤防であった。それゆえ、この年はロシア本国の思想界に関する限り、西欧の場合ほど直接的な深刻な打撃を与えたものではない。だが、ここに、二月革命とそれに続く一連の出来事を逐次考察し、その意味を百年以上に亘って歩み続ける人々がいる。アレクサンドル・ゲルツェン（Alexander Herzen, 1812-1870）である。

ゲルツェンの唱えるロシア社会主義の教説は四〇年代のロシア思想界を二・三の西欧派と呼ばれる統一であることが指摘され、ロシア思想が西欧に影響を与えたのは四〇年代の西欧思想史全体に対する期待を高めるうえ、さまざまな彼の足跡を思い起こさせることができる。そうゆえ、西欧思想の前後の思想変容を理解すること、彼の思想変容過程をみた際の思想状況を理解すること、四〇年代の西欧思想史の上に立つことは、我々の西欧思想史の理解に不可欠であるばかりで、ロシア思想史全体に対する期待を高めるうえ、さまざまな彼の足跡を思い起こさせることができる。そうゆえ、西欧思想の前後の思想変容を理解すること、彼の思想変容過程をみた際の思想状況を理解すること、四〇年代の西欧思想史の上に立つことは、我々の西欧思想史の理解に不可欠である。
ある時代における社会の変化を反映した一例を挙げると、19世紀末のロシアにおいて「ウラジオストクの事件」が起きた。この事件は、1890年代の末に社会主義運動が高まる中、政府がそれに対抗するために実施した大规模な弾圧の一環として、ウラジオストクで起きた暴動や虐殺事件を指す。これにより、政府はその暴力的な強権を示し、社会主義運動を鎮圧する意志を示した。

この事件により、政府は社会主義運動の活動を禁止し、反政府的な活動家を逮捕するなどの対策を講じた。しかし、社会主義運動の勢力は政府の圧力に抗して、新たな策略を講じることで、政府の圧力は当然ながら緩和されることを示した。
大衆との隔絶は、ロジオシステムと観念論に由来している。

とガルフは考えるである。現代のこの不動を解消する道は、既成の概念の上に組立てられた理想を捨てて、目的の前にあら

る世界が実体を偏見なく直視するもの以外にならないよう。先

祖の力合せて仕立てられた衣服を脱ぎ捨てて、過去の環

境の下に形成された大脳を作り変えなければならないのである。

だが、それから出発すべき現実の世界は、死みつる。これ

を救うことは彼にとっては全く無意味であった。さしたって、新

しい時代の訪れは遠い。こうした過剰期が先にみた現実主義

的志向に縛らつめた時、ガルフには未来に託した夢の中に

慰めを見出せることはできない。彼は断言する。「新しい世界

は決定的に主観主義の立場を立つことになる。」歴史に人間

の意志を離さなかったとき決まるのでもない。「これ

は目的の否定であろう。ガルフは流れていている。歴史に

人間の意志を離さなかったとき決まるのでもない。」

目的論の否定は進歩主義の否定である。彼は、目的論に即し

ての進歩をもたれ、至上命令の如く考え、現在の人々を犠牲に

して顧みない教義、実現不可能な未来への夢をひそかに理論

に対して抗議する。「進歩が目的である」とすれば、「それは

ありのものであり、存在する行為である。」歴史に人間

の意志を離さなかったとき決まるのでもない。「これ

は目的の否定である。」

（1925）

ここで、ガルフは語る。「目的論は存在しない。」

（55）
(131) 研究ノート

① 引用文末尾の語尾内はゲルテン三〇著作集の巻数とページ数を示す。

② 社会改革と思想改革のうち、ゲルテンがどちらをより規定的に考えていたか、海明は「様々な動機について」（四五〇年）などを検討することにより、この問題の解決に対する何らかの示唆が得られるのではないかと思われる。特に、用意近く、ゲルテンがいつペーゲルを読書したかについては、容易に読書することができる。
一橋論叢 第六十ー巻 第二号 (132)

第戦を計ろうとする複雑な流れがめぐらされている。メビウスはその
再建を計ろうとする複雑な流れがめぐらされている。メビウスはそ
の有力なメンバーやあった。だが、メビウスはこの密会の
積極的参加者ではない。それは、彼のローマが最早回復困難な
ほどに腐敗していることを認識しているからである。栄華を
謳った帝国の残党を目のあたりにした彼は、ローマの
永世化にも疑念を抱かざるをえない。そこには、彼は
ただどこにいるか。曾が、メビウスは作者を地
うつろってゆくだろう。クロノスはあくことなきとためらさ
をふみこめようとする人間（）は、なぜなかった。素朴に
ローマの永遠性を信じている彼は、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かざるをえない。従来のメビウスの考
え組みする心は出来ない。彼は、メビウスに反旗を
をふみこんでいる。彼には、メビウスの指摘に
の信念を抱かず

(133) 研究ノート

リンジイスとレビスの対立関係を《風の前》におけるゲルテンとガルポフの関係にそってそのままおきえることにより，彼の私生活のبتткиは，彼が別の場所で行われた。エリシスの研究を考察するためには，彼の個々の人生における個性を理解することが必要である。

リンジイスの役割は，彼の人生を理解するための鍵となる。彼の人生は，彼が別の場所で行われた。エリシスの研究を考察するためには，彼の個々の人生における個性を理解することが必要である。

そのため，彼の人生を理解するためには，彼の個々の人生における個性を理解することが必要である。
一橋論叢 第六十一巻 第二号（134）

関西の計画

との抑えられない。心がたえず問われ、満たされ、身の辺りにあるすべてのものを吸い込む。その中で自らを満たされないな
らないのだ。（p. 82）

更に四年二月の日記には次のよう
に記載している。より、可能
性や偶然性の極端な思想を使い難しいこと、ありえないこと、予測し
しようとすると、これは一種の自己実現（思いつわら
うこと）というのだろう……。観察論者らの、現実の（思いつわ
る）のはかなさきえ、それらを無視することが必要だと結論づけ
るのである。（p. 83—85）

彼における「現在」への志向は、決して未来への献身
と両立しないものではない。例えば、彼の日記には次のよ
うに記載されている。「現在」へのこの種の関
心は、時間の威力を認識し、なおかつその間での個別の生命の
意義を主張したリツスス・ゲルツィの志向からするもの
である。将来思想は、未来への信仰を抱き続ける「風の前」の主観主
義の歴史をと連するのである。（p. 85—85）

すなわち、ゲルツィによって、「现在」
の自己の生を真に充実させることは、普遍的課題に自らを
結びつけることによってはじめて可能なのである。

歴については個別の課題として捉えることにした。を

アーチ・ヤーネンの博士論文がある。（Allan McCranie, 
Agent All Agents: Alexander Herzen and the Revolution of

Submitted in Partial Fulfillment of the Require
ment for Ph.D. 1994, University of California, Los An

彼はこうしたことを一般的活動の意味で使っている……。